

CHALLENGER

[挑戦者たち] 13



上山高原 エコミュージアム

「開発」か、「保全」かに悩む町の人々
彼らが選んだのは、環境保全による地域活性化だった
手つかずの大自然が残る上山高原
今、新しい発想による地域づくりが始まった

プロローグ

爽やかな夏の風が吹き込む、新温泉町・上山高原。そつと目をやると、若いススキの穂に混じり、秋の七草として知られるオミナエシの黄色い花が咲いている。今や数が少なくなつた希少植物。まだまだ豊かな自然が残っていると感じたろうとした瞬間、声をかける人間がいた。

「昔は夏から秋にかけて、高原一帯が黄色一色に染まつたもんや」。
それは地元の老人であつた。お盆になると刈り取つて、町へと売りにいき、若者の小遣い稼ぎになつたという。
それはつい40年前の出来事。ここには今の私たちには想像のつかない風景が広がつていた。上山高原はかつて自然と人間が共生していた理想郷であつた。

太古の森

兵庫県北西部、鳥取県境の扇ノ山おののさん山ろくに広がる上山高原。一帯にはススキ草原が広がり、フナなどの広葉樹が生い茂る多様な自然環境が残る。イヌウシやツキノワグマなどを頂点とする様々な生き物が生息し、人々はその豊かな生態系を有する高原一帯を、「母なる山」と呼んだ。

春には雪どけとともにタムシバの白い花が咲き、夏はフナフナの緑が色濃く映え、秋には紅葉とススキの白穂、冬は一面の銀世界に覆われる。まさに太古の自然を彷彿とさせる場所。しかし、そこへ開発という時代の波が押し寄せようとしていた。

開発という波

昭和38年冬、この年、但馬は稀に

みる豪雪に襲われた。

「ここにスキー場を建設できないか」。それは地元住民の熱い願いだつた。高度経済成長の時代、上山高原周辺の集落も若者が都会へと移り、過疎化が進んでいた。

「このままでは村がなくなつてしまふ」と、危機感を募らせる住民たち。「新しい産業を」と、豊かな自然が残る上山高原に開発の目が向けられた。専門家を呼んでの現地調査が行われるが、霧が深いとの理由でスキー場建設は断念。その後も、何度かキャンプ場などの開発が行われるが、いずれも中止に追い込まれた。

その間も減つていく村の人口。村を活性化するためには、「開発」しかないという気持ちは年々高まつていく。

昭和60年代に入り、ようやく県による滞在型リゾート開発が検討されるこ

2006 但馬 "牛まつり"

●場所：県立但馬牧場公園（美方郡新温泉町丹土）

造型物コンテスト&パレード

あなたも楽しい但馬牛をつくらせてみませんか！

参加費 10万円 **最優秀賞 30万円!** 参加者募集中

●お問い合わせは

新温泉町振興課 TEL.0798-92-1131 <http://www.town.shinonsen.hyogo.jp/>

但馬牛をイメージした造型物が大舞台!!

- 但馬牛のファッションショー
- 但馬ビーフの特産料理コーナー
- 花嫁行列、牛道開路、ステージ演技など



9/24(日)

開催時間：9～15時

酒まつり同時開催





ブナの原生林が続く道(右)、徐々に復元しつつあるススキ草原(左)

となる。これが過疎化の打開につながる。期待を膨らませる住民たち。だが、この時、開発が全く逆の方向へ進むとは知る由もなかった。

大きな方向転換

平成13年、各分野の専門家などからなる検討委員会から示された計画は、住民の意図するものとは全く反対のものだった。開発」という文字はなく、高原の自然や地域の伝統文化を「保全」して「つ」という取り組みが示されていた。

「E・N・J・I・J・I・A・M」構想。それは地域をまるごと「生きた博物館」に見立てて多くの人に「アビトル」とともに、そこにある有形・無形の資源を、地域の人が中心になって活かす「つ」という計画。

聞き慣れない言葉に「とまどう住民。そんなことで地域が活性化するのか」と、半信半疑の表情を浮かべていた。

環境保護の方向へ転換させたのは、上山高原一帯のあまりある豊かな自然環境だった。絶滅の恐れがあるイヌワシやツキノワグマ、緑豊かなブナの森。開発の手が遅れていた分、うらやむような豊かさが残っていた。

しかし、期待を裏切られたという思いにかられる住民。その年の8月、初めての地元説明会が行われた。

立ち上がる人々

E・N・J・I・J・I・A・Mの構想を掲げた地元住民への説明会。社会情勢が変わったといっても、地元の反応は薄かった。それでも、参画と協同の取組を進める県は、地元住民を中心とした「ワイクシヨフ」参加の呼びかけを行う。あくまでも地域主体で、地元住民と行政がスクラムを組み、息の長い取組ができる仕組みづくりを目指していた。

そのころからのメンバーで、現在、NPO法人事務局長の西川は語る。「その頃、高原の自然がかなり荒廃しつつありました。ミスナラの立ち枯れ、特に人手が入らなくなつたススキ草原は壊滅的。この保全の話がきた時は、渡りに船だと思いましたが」。

戦後、バルブ材や木材の需要が高まるにつれて、上山高原でもブナやナラの原生林が伐採され、林業効率のよい針葉樹が植林されていた。

また、ススキ草原は昭和30年頃まで但馬牛の牧草地として活用され、「草原」としてその植生を保っていたが、伝統の但馬牛の頭飼いが衰退する中、草原は利用されることがなくなつた。草刈りや山焼きといった人手の入らない草原は、「林」と化す。

ササや灌木(かんぼく)に覆い尽くされたススキ草原。かつての白い「もっちゃん」はそ

日産全車種取扱い
日産但馬販売株式会社 お気軽にご来店ください。お待ちしております。

<p>本社営業所 豊岡市九日市下町 TEL 0796-23-2332</p>	<p>豊岡北営業所 豊岡市中陰 TEL 0796-23-2323</p>	<p>八鹿営業所 養父市八鹿町八鹿 TEL 079-662-2223</p>	<p>和田山営業所 朝来市和田山町枚田岡 TEL 079-672-0023</p>
--	--	--	---



SERENA Highway STAR



PRESAGE



SKYLINE COUP / SEDAN



SYLPHY

2006 特別仕様車が勢ぞろい!



の姿を消そうとしていた。

「市民一体となれば、広い上山高原の自然を守るはずだ」。このチャンスを逃してなるものかと思っただけでなく、理解を求めて…

理解を求めて…

NPO法人とは特定非営利活動法人のことを指す。ボランティア団体と勘違いされることが多いが、NPO法人は利益を得ることも許される。企業と違うのは、利益を自由に使えないこと。収益はその法人が掲げる公益的な目的のために使わなければならない。

上山高原の主要部分373ヘクタールは国有地となっている。この広大なエリアを保全するには、ボランティアだけでは到底困難。NPO法人なら、広く参加を呼びかけて永く続けていける。目標は定まった。

まず準備段階として、資源の掘り起こし、現状把握から始まった。専門

家の意見を聞きながら、広いエリアをくまなく歩いて回った。

1年かけて行った調査は驚きと再発見の連続だった。かつて殿様が検地のために通った歴史街道、左馬殿道さまたまのちのの発見は、地元の名老から聞きだしたものだ。さらに最盛期には、約400人もの木地師きぢし（ろくろを使っ

て木工品を作る職人）がいたと言われる。木地屋跡きぢやしあとなど、歴史的にも価値の高い遺産が多く残されていた。

そして、四季折々に美しい表情をみせる原風景。改めて、上山高原の懐の深さを感じた面々。活動に対する不安は勇気へと変わっていった。

上山高原のふもとには、上山を取り巻くように7つの集落が点在している。住民は自然の恩恵を受けてきたと同時に、闘ってきたという一面も持っている。雪が深く厳しい生活。自然に裏切られることもしばしば。自然を守るというところに割り切れない思いを持つ人も多い。

「私もそうでした。自分たちの生活はどうなるんだと。でも、結局、最後は自分たちに返ってくるんです」と、先の西川も言う。

かつて開発論議が華やかになりし頃、各集落の区長を中心に結成された、上山開発促進協議会かみでも、これから地元がとるべき道について熱い

議論がなされた。メンバーたちと県や旧温泉町は、この協議会と何度も検討を重ね、地域の実情にそくした体制づくりを模索。この協議会は、現在、「上山自然環境活用促進協議会」と名を変え、EPMミュージアムの取り組みをバックアップしている。

ワークショップ参加者も男性がほとんどだったが、だんだんと地域の主婦たちの参加もみられるようになった。

また平行して、ススキ草原の再生に向けたササの刈り取りがスタート。人の背丈以上に伸びたササを、会員たちが刈り取っていく。体力と根気のいる作業だ。秋にはススキ林を伐採し、広葉樹の苗を植える作業も始まった。

試行錯誤の取組の中、会員達の励みは、参加者を募って行う保全・復元作業プログラムに参加してくれた人たちの充実感にあふれる笑顔だった。

そうして、平成16年7月、特定非営利活動法人 上山高原EPMミュージアムは、その一歩を踏み出すことになる。

真価が問われるとき

準備段階から数えると、5年目の夏を迎えたEPMミュージアム。高原には植樹したブナの木が徐々に根付き

始めた。特にススキ草原の復元は著しい。ササはきれいに刈り取られ、ススキの穂が徐々に広がっている。

お子様の思い出を本というカタチに残す！
 図書館製本世界一の工場で作る1冊だけの本を作ろう！

ナカバヤシ株式会社
 兵庫工場
 〒687-0313 豊父町大原町西谷111
 TEL.079-669-0227

押入にしまっている絵をそのまま絵本に…、
 小学校の日記・絵日記、通信を1冊の本に…、
 お子様やお孫様の記念日に贈る世界に1つだけの本。



自然観察会(右)、ササや灌木の刈り取りといったススキ草原の復元活動(左)



上山高原は名滝が多いことでも有名。霧ヶ滝渓谷にある霧ヶ滝、赤滝からの流れは雨が降っても決して濁ることはないという。ほか小又川渓谷は数々の急な断崖で形成され、兵庫県の名勝に指定されている。

活動はまだ軌道に乗ったばかり。徐々にはあるが、自然観察などのプログラムに、1年に5度も訪れるフ

ンも増えつつある。地元の産物を活用した食の提供や、集落をめぐるプログラムも充実させていく予定だ。

現在、会員は地元住民を中心に約100名。保全、プログラム、サテライト、PR、調査研究の5つの部会で活動している。この夏には旧八田中学校を活用した「エミューシヤムのベース基地 上山高原ふるさと館」がオープン。引越しの片付けもままならない新しい事務所で、準備に追われる会員たちの姿があった。

成功への近道は地元を愛する心と、それを支えるファンづくり。パンフレットの表紙に描かれた「イヌワシ」と、上山高原の空は近い」という文字。地元を誇りに思う彼らの気持ちがしっかりと込められている。

「広葉樹もただ植えたらいいというものではない。上山高原に育つものでなければ、生態系を保つことができない。苗づくりからはじめる百年かかる事業」と会員たちは語る。これが自然復元に携わる会員たちの誇りと信念だ。火入れや放牧も試行という形で復活している。

2年前、幸運にも西川はイヌワシを間近で見た。ススキ草原を低空で飛び去る勇姿が忘れられない。翼を広げると約2メートルもあるうかという巨大さ。自分たちの活動に間違いはないと確信した瞬間だったという。



軽く、美しく、地球と人にやさしい
アルミベッド





旧店舗より
南へ1.3km

竹田家具

和山**竹田家具** ホームページアドレス <http://kinokagu.com/>
〒669-5261 兵庫県朝来市和山町牧田756 TEL 079-672-3456